自治連シリーズ⑧

コミュニケーションを大切に

漆台向坂自治会会長　横路　秀雄

外環道が出来、区画整理で、車社会として便利を享受している。一方近所に居た人が別れ別れとなり、新しいコミュニケーションをつくらねばならないが、路地裏の井戸端会議のような家族ぐるみのお付き合いは不可能となっている。

人は人を求めるものであるが、同好会や趣味の会がコミュニケーションの本流となっているように見える。これも高齢者が参加できる期間は、経過と共に減少していくのかもしれない。

戦争を体験し、食料のない少年時代を過ごしてきて、残りの僅かな人生を楽しもうと、医療の恩恵にも浴し、元気な後期高齢者と自負している。

自治会が地域社会の共同体として、コミュニティーを盛んにしたいと思っても井戸端もなく、きっかけもなく、家に呼ぶことは、迷惑を掛けるからと辞退される。地域には小さな集会場があって、自治会の集まり、食事会、時に宴会も出来て和気藹々と話し合う施設があったら楽しいと思う。

23年度の事業計画には、親睦旅行やお花見が計画されていたが3月11日の東日本大震災で見送ることにした。

防犯パトロールは月2回行っている。最近、拍子木を買って、「戸締り要心・火の用心・子供の安全守りましょう」「カチカチ」とやっている。毎回10人から15人位の参加者であるが、「受身から主役に」を合言葉に割付をしている。

本年10月11日に埼玉県防犯協会・埼玉県警察本部長の表彰状をいただきました。**防災訓練は**、東日本大震災によって減災意識が高まっている。如何に、災害から身を守り、被害を少なくするかは、平素の自守訓練が重要だと思っている。

先月、自治連の研修で、十日町市を訪問いたしました。冒頭に「自らの身の安全は自分で守る。自分たちの地域の安全は、自分たちで守ることが防災の基本。」と書いてありました。また、阪神淡路大地震では、6400人の80%が圧死で4割以上の方が10分以内に亡くなられている。なお、家屋の倒壊から救出された人の60%は近隣の住民の救助活動によるものと報告されている。自治会の防災活動の中で班長が地震直後に、一次避難所「広場、空き地、道路」等において、安否の確認をすることが、これに習うことになる。

目前の消火活動は当然のこと、避難所に移動の場合、通電時の火災防止にブレーカーを落とすことも減災につながる。今後家族構成等。住民登録によって適切な救助活動が行われるようにしなければならない。

敬老会、会員116世帯の内、75歳以上の後期高齢者が私を含め50名いる。足腰の弱い人に、敬老会場まで送迎をするといっても出席者は数名である。毎年班長と役員で早朝から、薪で古式にのっとり、和光の無農薬米で、80食作り紅白饅頭と共にお祝いをしている。人集めは苦労するが、楽しみを増やせばと、プロジェクターを買い込んでお笑いや映画を上映している。地域のコミュニケーションは思考錯誤で永遠の課題、本気は根気かもしれない。